

## チェスタトン『ブラウン神父』に見るキリスト教哲学(前半)

Christian Philosophy in 'Father Brown' by G. K. Chesterton, Part I

山口 隆介

Yamaguchi Ryusuke

### 要 旨

本稿は、『ブラウン神父』シリーズに見出される G. K. チェスタトン (1874-1936) の思想を読み解く試みであるが、特にキリスト教哲学と言いうるものを剔抉することに目標を定める。『ブラウン神父』シリーズを貫くキリスト教思想に言及した解説は多い。しかし、本シリーズを信仰生活への入門書あるいは信仰生活の知的な刷新に役立ちうる信仰の手引書というところまで思い入れて読解した論述は、管見の限り、日本語では見かけないように思う。本稿は、そのような読解の一試行であり、『ブラウン神父』ものの社会における機能を拡充することが本研究の目指すところである。

チェスタトンは翻訳家泣かせの作家で知られており、『ブラウン神父』短編集のタイトルも例外ではない。特に第 1 短編集 *The Innocence of Father Brown* は出版社ごとにタイトルが変わってしまうほど、翻訳が安定しない。本稿では、短編集のもっとも普及している完訳版である創元推理文庫版に準拠した訳を用いることとした。各作品タイトルも同じくそれに準じるが、初出に限り原題も併載した。作品本文の訳は主に創元推理文庫版を参照しつつ筆者が新たに訳出した。

Key Words: チェスタトン ブラウン神父 キリスト教

### 1. 『ブラウン神父』の宇宙観

『ブラウン神父』の劈頭を飾る「青い十字架」*The Blue Cross* で、チェスタトンはブラウン神父にこう語らせる。

“.....reason is always reasonable, even in the last limbo, in the lost borderland of things. I know that people charge the Church with lowering reason, but it is just the other way. Alone on earth, the Church makes reason really supreme. Alone on earth, the Church affirms that God Himself is bound by reason.”<sup>1</sup>

「理性は常に合理的ですよ、あの地の果ての<sup>リンボ</sup>辺土、物事の果てる境の地でも。知っての通り、人々は教会のことを理性を貶めたと非難する。だが、まさにあべこべなのです。ただ教会だけが理性を真に最高のものとしている。ただ教会だけが、神すらも理性にしばられていると断言しているのです」

神父が持っている宝石付きの十字架を狙うフランボウが変装した偽神父は、宇宙の無限の広さは人間の理性の限界を思わせ、ひいては理性が生み出した善悪が通用しない世界があることに気づかされる、してみればこの地球上でも善悪はかりそめのものに過ぎないという哲学を語る<sup>2</sup>。これは、フランボウが盗むという生き方を選んだ理由と解釈できる。フランボウが盗みをたくらむ作品は「青い十字架」、「奇妙な足音」*The Queer Feet*、「飛ぶ星」*The Flying Star* の3つだが、これらはすべて富豪の持つ宝物か教会の宝物を盗もうとする話である。世の中でうまくやっている者から、フランボウから見て不正に蓄えた富を奪うことは悪ではないという思想が、フランボウの盗賊としての哲学であることは明らかである<sup>3</sup>。

チェスタトン自身とブラウン神父は、フランボウの悪しき神学 *bad theology* を問題にしても、不公正を正そうとしない社会的強者へのまなざしはフランボウと共有しているように思われる。チェスタトンは資本主義社会における富の偏在を不正と見、分配主義という一種の社会主義的(同時に自由主義的)政策を主張していた。また、ブラウン神父は『《ブルー》氏の追跡』*The Pursuit of Mr. Blue* で、「……あまりにも大勢の億万長者が金儲けをしている手口を考えるなら、世界中のほとんどの誰もが、たとえば、かの金持ちを海に投げ込むようなことをしでかしたとしても、まったく自然なことじゃないですかね……わたしならやったかもしれない……モシ教会ノ權威ガ私ヲ固ク縛ッテイナクッタナラバ *nisi me constringeret ecclesiae auctoritas*」と言っている<sup>4</sup>ように、不正な富者への敵意には同情を示して<sup>5</sup>。

かくて不公正への怒りという点でチェスタトンおよびブラウン神父はフランボウに同調しうることが確認できる。いっぽう、チェスタトンおよびブラウン神父は、理性すなわち善悪と宇宙の関係についてこう語る。

“Reason and justice grip the remotest and the loneliest srar. Look at those stars. Don't they look as if they were single diamonds and sapphires? Well, you can imagine

any mad botany or geology you please. Think of forests of adamant with leaves of brilliants. Think the moon is a blue moon, a single elephantine sapphire. But don't fancy that all that frantic astronomy would make the smallest difference to the reason and justice of conduct. On plains of opal, under cliffs cut out of pearl, you would still find a notice-board, 'Thou shalt not steal.'"<sup>6</sup>

「理性と正義はもっとも遠く孤立した星をも捉えます。あの星々をごらん下さい。まるでひとつひとつがダイヤモンドかサファイヤのように見えませんか。そう、どんな変てこな植物学でも地理学でもお好みで想像してもらっていいですよ。アダマントの森にブリリアントカットの葉が茂っているのを思い浮かべてごらん下さい。しかし、かかる錯乱した天文学であっても、行いの理および正義というものに極めて些細な違いさえ齎すなどとは空想めさるな。オパール<sup>パール</sup>の原にも、切り立った真珠の崖の下にも、こう書いている立札を見出すことになるでしょう。「なんじ盗むなかれ」と」

「なんじ盗むなかれ」は十戒の1つである。すなわち、ブラウン神父がここで理性 reasonと呼んでいるのは、道具的理性ではなく、人間の限界内での活動に終始している能力でもない。物理的な宇宙を超えて神が定めた、それどころか神自身すら神である限り従わなければならない絶対的な善や真理<sup>7</sup>につながりうる能力である。

チェスタトンにとって、宇宙も人間も宇宙を超えるこのような真理なしには完成しない。このような真理を欠いた宇宙についてチェスタトンは1つのイメージを持っていたと思われる。「シーザーの頭」The Head of Caesar では無神論者を悪夢で惑わす「中心のない迷路」a maze with no centre<sup>8</sup>と述べられ、「イズレイル・ガウの誉れ」The Honour of Israel Gow では以下のように述べられている。

"Far as the eye could see, farther and farther as they mounted the slope, were seas beyond seas of pines, now all aslope one way under the wind. And that universal gesture seemed as vain as it was vast, as vain as if that wind were whistling about some unpeopled and purposeless planet. Through all that infinite growth of grey-blue forests sang, shrill and high, that ancient sorrow that is in the heart of all heathen things. One could fancy that the voices from the underworld of unfathomable foliage were cries of the lost and wandering pagan gods: gods who had gone roaming in that irrational

forest, and who will never find their way back to heaven.”<sup>9</sup>

「彼らがどんなに坂を上って行っても、目が届かぎり松の海の向こうにまた松の海が続いていて、風ですべて一方向に坂をなしてなびいていた。そのような宇宙の身振りが、広漠であるだけに空漠として無意味に見えた。まるで風がどこかの住民も存在意義もない惑星中をピューピュー吹きすさんでいるかのように空しく思えた。灰色がかった青い森が無限に大きくなっていくのを貫いて鋭く高く響き渡っていたのは、異教に関わる物事すべての中心にある、あの古の悲しみであった。無限に広がる葉また葉から成る黄泉の国からの声が、空想次第では、道を失いさまよえる異教の神々の叫び、不合理の森をうろつくことになってしまい、天への帰り道を決して見つけることがない神々の叫びにも聞こえただろう」<sup>10</sup>

中心があるためには外枠がなければならない。中心を欠いた迷路とは、外枠がなく無限に広がっている迷路である。この宇宙に確たる真理なく閉じ込められたならば、そこはただ人を迷わせるだけの無限の迷路に他なるまい。また、無限に広がると錯覚された松林からの松籟を異教の神々の叫びと思わせる古の悲しみについては『アシジの聖フランシスコ』St Francis of Assisi が参考になる。

“What was the matter with the whole heathen civilisation was that there nothing for the mass of men in the way of mysticism, except that concerned with the mystery of the nameless forces of nature, such as sex and growth and death.”<sup>11</sup>

「異教文明全体で問題となっていたのは、多くの人にとって神秘主義となるものが何もなかったということである。無名の自然力の神秘に関わる神秘主義、例えばセックスや成長や死といったものの神秘主義を例外として」<sup>12</sup>

チェスタトンはこの箇所先立つ箇所、古代の異教文明が自ら気づいていた過ちを、「自然崇拜の誤謬」the mistake of nature-worship, 「自然であることの誤謬」the mistake of being natural などと呼び、理性と自然に従って真つすぐ歩んでいけば、不幸に会うことはないという観念を古代の異教徒、すなわちギリシア人たちを実践し始めたと語る<sup>13</sup>。ただ、これは人が己の鼻についていくような自己完結した努力であって<sup>14</sup>、自己を超えるものを持たない以上、いつかそれ以上先にいけないところに突き当たり、未来を見出すこ

とができなくなる。そうすると、最後は「無名の自然の神秘に関わる神秘主義」に陥る<sup>15</sup>。

ギリシア人による理性と自然に即した生き方は、それ自体悪ではない。ただ、この自然を、すなわち宇宙を超える真理に向かっていなかったために、その健全さを維持しえなかったのである。ましてや、絶対的な善を否定して正当化されているに過ぎない悪ともなれば、その水準を維持することはできない<sup>16</sup>。それは最終的には人間を卑劣にしていくだけである<sup>17</sup>。

かくて、チェスタトンにおける宇宙と真理との関係について確認できた。真理は宇宙を超える絶対的なものであり、それなくしては宇宙は無意味な場所となる。そこに住む人間にとっても、宇宙を超える真理を基準とすることなくしては、本来宇宙そのものも持っているはずの善の水準すら維持していくことはできない。

そして、宇宙を超える真理を目指すことは宇宙の否定ではない。宇宙そのものに存在意義があり、宇宙を超える真理を目指すことは、宇宙の完成であるということは、「イズレイル・ガウの誉れ」*The Honour of Israel Gow* でのブラウン神父の以下の発言で示唆されている。

“.....there is one mark of all genuine religion: materialism. Now, devil-worship is a perfectly genuine religion.”<sup>18</sup>

「正真正銘の宗教の印というのが1つある。物質主義です。おや、ということは、悪魔崇拝はまったく疑いなく正真正銘の宗教ですね」

ここで言及される物質主義 *materialism* は、これまでのほとんどすべての日本語訳で「唯物主義」と訳されているが、真の宗教と両立する思想なので物質主義のほうがよからう。なぜ、物質主義が正真正銘の宗教と両立するのか。これはグノーシス主義やカトリ派を排斥してきたというキリスト教の歴史を見る限り、キリスト教に関しては成り立つ。しかしながら、チェスタトンにとって物質主義と正真正銘の宗教が両立するという意味が何かを知るには、『聖トマス・アクィナス』*St Thomas Aquinas* が参考になろう。

本書では *materialism* は多義的に用いられている<sup>19</sup>。まず、精神が物質から生じると考える唯物論思想という意味での *materialism*<sup>20</sup>でこれは、唯物論、唯物主義と訳してしかるべきであろう。人間を環境の奴隷と見なす決定論的な *materialism*<sup>21</sup>も同義である。そして、この決定論を内包する唯物論という意味での *materialism* は当然ながらすべての文

脈で否定的に言及されている。

また、決定論を内包する唯物論というような明確な意味内容を持たず、物質中心的態度と言った意味で使われている **materialism**<sup>22</sup> もあり、そして上記 2 つの意味のどちらとも限定できない **materialism**<sup>23</sup> もある。これらの意味の場合、否定的な言及がされるのはもちろんだが、箇所によっては肯定的な言及がなされる場合がある。それは、トマス哲学の本質的な面の 1 つとして **materialism** が語られる場合である。

“St. Thomas stood up stoutly for the fact that a man's body is his body as his mind is his mind; and that he can only be a balance and union of the two. .....a thing that might be called Humanism or even claimed by Modernism. In fact, it may be Materialism:.....”

「聖トマスは、人間の精神が彼の精神であるのと同じく、人間の体が彼の体であるという事実のために、そして、彼〔人間〕はこの 2 つのものの結合にして均衡以外の何ものでもないという事実のため、断固かつでっぷりと立ち上がった。……これをヒューマニズムと呼んでもいいだろうし、モダニズムと呼んでもいいかもしれない。実際には、それは **Materialism** であるだろう」

この箇所で **materialism** という語は大文字で開始され<sup>24</sup>、人間の身体を精神と同じく人間の不可欠の一部として認めるトマス・アクィナスの立場<sup>25</sup>と結び付けられている。

チェスタトンの理解<sup>26</sup>では、トマス・アクィナスに至るまでのキリスト教哲学はアウグスティヌスを含めプラトンの影響下にあり<sup>27</sup>、精神を重んじるあまり身体蔑視のきらいがあった<sup>28</sup>が、古代の哲学者の中でチェスタトンの見るところでは唯一人、身体と感覚経験を重んじていたアリストテレス<sup>29</sup>をトマス・アクィナスが復権させることで、キリスト教哲学は新しい段階に入った<sup>30</sup>。すなわち、精神だけでなく身体も重視する思想であることから当然生じてくる感覚経験重視<sup>31</sup>の思想、そして、我らが経験できる物質的現実を現実として認めるという根本態度<sup>32</sup>を伴う段階に。そして、この意味での物質主義復興の機縁はキリスト教の教義のうちにあった、すなわち、体の復活<sup>33</sup>、キリストの受肉<sup>34</sup>、神による創造<sup>35</sup>に、物質的なものの存在意義を強く認める思想的土壌があった。以上がチェスタトンが『聖トマス・アクィナス』で示すキリスト教思想史概略である<sup>36</sup>。

ゆえに先の正真正銘の宗教の印としての物質主義云々という命題は、次のように言い換

えられるだろう。「正真正銘の宗教の印が1つある。我々の身体や周りの感覚経験できる物体を含め、現実を現実として認めているということです。ということは、悪魔崇拜はまったく疑いなく正真正銘の宗教ですね」。正真正銘の宗教——『ブラウン神父』では当然キリスト教もそこに含まれている——であるならば、この宇宙ないし現実を、虚構か、単により高い真理に至る踏み台として二次的なものと見なさない。そこは神による創造、キリストの受肉、体の復活という神の業が実現するかけがえのない場であり、それゆえに現実には、悪魔にとっても神との戦いの場であるということになる<sup>37</sup>。

ここで言われている現実とは、チェスタトンのことばを借りれば「卵は卵」であり「ブタはブタ」である現実である<sup>38</sup>。そして「犬は犬」である現実を語ったのが「犬のお告げ」*The Oracle of Dog* である。この作品でブラウン神父に事件を持ち込む青年は、犬が取った理由不明の行動を神秘主義的に解釈したために、犬の吠えついた人物が殺人事件の犯人であると思ってしまうが、ブラウン神父は犬が取った理由不明の行動を犬は犬に他ならないという視点から解釈したので犬の行動の話を聞いただけで真相を察する。そして、同作の最後でブラウン神父はこう語る。

“It’s the first effect of not believing in God that you lose your common sense and can’t see things as they are……reeling back to the bestial gods of the beginning, escaping into elephants and snakes and crocodiles; and all because you are frightened of four words: ‘He was made Man’.”<sup>39</sup>

「神を信仰しなくなることで生じる最初の結果は、常識を失い、物事をあるがままに見られなくなることです……始原の獣神たちに舞い戻り、ゾウに、ヘビに、ワニに逃げ込むことになる。そういったことはすべて、‘He was made Man’の4語を恐れるがゆえに起こるのです」

‘He was made Man’は日本語では、受肉の教義を語る文としても、創造の教義を語る文としても訳されてきた<sup>40</sup>。どちらの訳であっても、現実をあるがままに見るということが『ブラウン神父』においてキリスト教信仰と結び付いていることに変わりはない。

かくして、本章での議論を纏めると以下ようになる。『ブラウン神父』の宇宙観において、宇宙は宇宙を超える真理の光に照らされるのでなければ無限の迷路であり、それ自身の美や価値はあっても宇宙を超える真理との関わりなしに維持し続けることはできない。

しかし、確かにそれ自身の美や価値は持っているものであり、宇宙を超える真理——ブラウン神父にとっては神——の光の下にあることで、それをありのままに認めることができる<sup>41</sup>。

## 2. 『ブラウン神父』の教会観

次に、『ブラウン神父』における教会観・宗教観を検討することにしたい。前章でみたとおり「青い十字架」ではブラウン神父のセリフとして教会こそが理性の守り手として言及され、また、「《ブルー》氏の追跡」では、教会の権威に縛られているということが神父自身を罪を犯すことから守っていると、同じくブラウン神父のセリフとして述べられている。

しかしながら、ブラウン神父は教会の伝統とされるものや、いわゆる宗教に盲従しているわけではない。

例えば「ダーナウェイ家の宿命」*The Doom of The Darnaways* では、「私が、たった1人の靈魂の正気を救うためには世界中のゴシックアーチを粉みじんにつぶしてしまおうとするということが分かっていないなら、私の宗教についても自分が分かっていると思うほど分かってはいませんよ」<sup>42</sup>と言及され、キリスト教文化が生んだ伝統的な建築もそもそもは靈魂を救うためのものであり、その障害になるならむしろ破壊してしまうのがキリスト教的であるという過激な言明がなされている。ここでは伝統文化はあくまでキリスト教という宗教の外形に過ぎず、かつ一種の道具に過ぎないという割り切った見方が現れている。

また、「ムーン・クレサントの奇跡」*The Miracle of Moon Crescent* では「嘘をつくことは宗教に仕えることになるかもしれませんが、神に仕えることではないと私は確信しています」<sup>43</sup>と述べられ、宗教と神の区別がなされている。これは見える教会と見えない教会の区別に相当すると言えるだろう。「ブラウン神父の復活」*The Resurrection of Father Brown* ではブラウン神父が、「私は自分では反教権主義的だと思っています……」<sup>44</sup>と語っていることも併せ読むと示唆的である。もっともその後で「しかし、聖職者への干渉さえなかったら教権主義は今の半分になっていたことでしょう」<sup>45</sup>と続き、教権を守ろうとするのは聖職者が世俗の干渉から独立するため本来であり、いわゆる教権主義的態度は干渉への反動として生じているという理解が示されているが、この主張が教権が世俗に対して支配権を持つことを支持するという意味での教権主義的主張でありえないこともまた明白である。



教権主義ひいては制度としての教会、見える教会への『ブラウン神父』における見方をさらに示唆するのがアリスティード・ヴァランタン Aristide Valentin の自死の描写である。

ヴァランタンは、「理性の限界を知っている」人間であると地の文でも明言されている<sup>46</sup>が、同時にブラウン神父とは異なり、反教會的な人物として描かれている<sup>47</sup>。人間の限界の中で人間がいかに努力すべきかについて、チェスタトンがブラウン神父に代表させている思想とは違う決断をなす<sup>48</sup>キャラクターである。

ヴァランタンは「秘密の庭」The Secret Garden の最後で自死を遂げているのが発見されるが、その時、彼の表情は「カトーのプライドに勝るものがあつた」<sup>49</sup>と記述される。原文でも Cato とだけ書かれているが、歴史上の著名人としてのカトーは、大カトーと小カトーの2人おり、チェスタトンの文章だけではいずれのカトーかはっきりしない。これまでの日本語訳では大カトーとも小カトーともされており、またどちらとも言明しない訳もあった<sup>50</sup>。

比較的多くの訳者が大カトーとしているが、大カトーは自殺をしていない。「泥棒天国」The Paradise of Thieves でも、「カトーのように捕まらないための〔自殺用〕毒薬を持ち歩いている」<sup>51</sup>という文言が登場し、『ブラウン神父』ではカトーの名は自殺と結び付いていることが確認できる。してみれば、ここでのカトーは小カトーであろう<sup>52</sup>。

小カトーことウティカのカトーは共和制を支持してカエサルと対立し、カエサルに敗れた際カエサルから助命の申し出を受けたが、共和主義者としてカエサルを人の罪をゆるすことのできる特別な存在、上位の存在と認めるわけにはいかないという理由で自殺したと言われている<sup>53</sup>。「秘密の庭」でヴァランタンは反教會的動機から殺人を犯し、真相を見抜いたブラウン神父の「告解を勧めなければならない」<sup>54</sup>というセリフの後で、自室で自殺しているのが発見される。彼が自殺に籠めた意味、すなわち罪をゆるす神父の権威を認めないという彼の意思を浮かび上がらせるために、ヴァランタンの死に顔は小カトーに擬えられているのである。

『ブラウン神父』において、これほどまでに好意的に描かれている自殺はヴァランタンのものだけであり、チェスタトンがヴァランタンに敬意を示しているとさえ言えるかもしれない。キリスト教が自殺を認めないということは有名である。そしてヴァランタンの自殺は、人を罪から解き放つ聖職者の、ひいては教会の権能を認めないという意味で徹頭徹尾反教會的な自殺である。にもかかわらず、その自死は英雄の自決として描写されている。ここから読み取れるものは何であろうか。

チェスタトンは『正統とは何か』Orthodoxyで自殺を最悪の罪の1つとして論じている<sup>55</sup>。しかし、その論調は神に対する罪としての非難ではない。「人を1人殺す者は1人の人間を殺すに過ぎない。自分を殺す者はすべての人間を殺す。彼に関する限り、彼は世界を全滅させるのだ」<sup>56</sup>と論じているように、むしろ、現実世界の存在および現実世界そのものに対する破壊<sup>57</sup>としての面を指摘しているものである。

自殺についての議論の中でチェスタトンは自殺者と殉教者との違いについても指摘する。それによると、自殺者は何ものにも関心を持たず、すべてが終わるのを望んでいるが、殉教者は自分以外の何かに関心を持っており、それが始まるのを期待している<sup>58</sup>。自殺者は宇宙を破壊するが、殉教者は「自分の外に心を置き、何かが生きられるようにするために死ぬ」<sup>59</sup>。

殉教という語の宗教的響きはヴァランタンの死にそぐわないように思うが、チェスタトンが「自分の外の何かを生かすために死ぬ」ことを評価していることに注目したい。

ヴァランタンが被害者となった富豪を殺したのは、富豪がカトリック教会の信者になるうとしていたからであった。当時フランスのカトリック教会は、1905年の政教分離法制定で完全に公的空間から排除されていた。宗教予算が廃止され、聖職者の俸給も撤廃されたため活動力が低下していた。そこに富豪の寄付という形で巨万の富が流れ込めば、カトリック教会が息を吹き返し、公的空間で再び影響力を持ち始めるかもしれない。それを恐れるあまり、ヴァランタンは富豪を殺したのであった<sup>60</sup>。

ヴァランタンは、フランス共和国の政教分離を守るために殺人を犯し、罪をゆるす神父の権威を拒否して死んだ。教権から自由な公的空間を生かすため、ヴァランタンは死んだと言えよう。すなわち、ヴァランタンの死を、共和国の理念のための殉教とチェスタトンが評価した可能性が指摘できる。それゆえに、ヴァランタンの死は共和政支持の英雄小カトーに擬えて描写されるのである。

ヴァランタンの殺人は教会が私的な寄付により潤うという政教分離の観点から見ても問題のない事態を憂慮して犯したものであり、是認できる余地は乏しい。しかも、その自殺は文字通り神を拒むに等しい動機によるものと解しうるものである。だからこそ、その死が英雄的なものと描写されていることは、『ブラウン神父』における人物の評価基準が、目に見える教会制度に収まり切らないものであることを示唆する<sup>61</sup>。

（後半へ）

# 付記 日本語訳の刊行履歴

井上ひさし編『『ブラウン神父』ブック』（春秋社、1986年）によれば、雑誌「英語青年」で大正5年10月から19回にわたって日英対訳の形で掲載されたのが初めての紹介である。大正5年は西暦1916年で、チェスタトンがブラウン神父ものを休筆していた期間に当たる。

短編集収録作品（+『村の吸血鬼』）をすべて完訳しているのは、ハヤカワ・ポケット・ミステリ版と創元推理文庫版である。前者はすべて村崎敏郎の訳で昭和1957年に完結した。後者は1959年の初版では訳者表記が「福田恒存+中村保男」となっているが1982年の版以降は中村保男のみの名前が挙がっている。表紙が3度変わっており、現在の表紙は2017年の最新版で、装画表記は「八木美穂子」となっている。

新潮文庫からは第1短編集が橋本福夫の訳で『ブラウン神父の純智』として刊行されており、第2短編集『ブラウン神父の知恵』は橋口稔訳である。そして、グーテンベルク21刊行の電子書籍として、橋本訳『ブラウン神父の純智』、橋口訳『ブラウン神父の知恵』『ブラウン神父の懐疑』『ブラウン神父の秘密』が、各巻を『ブラウン神父の知恵1』『ブラウン神父の知恵2』というように2巻に分けて収められている。

最近の訳ではちくま文庫に第1短編集と第2短編集が『ブラウン神父の無心』（2012年）、『ブラウン神父の知恵』（2016年）という訳で刊行されており、訳者は両方とも南條竹則、坂本あおいである。

ハヤカワ・ポケット・ミステリ版の第1短編集『ブラウン神父の無知』の新訳として刊行されたハヤカワ文庫版『ブラウン神父の無垢なる事件簿』（2016年）は田口俊樹による翻訳で、新保博久の解説が付いている。新保の解説は、雑誌掲載時の順序では（そして雑誌連載当時のリアルタイムの読者にとって『飛ぶ星』が掲載されるまでは）『奇妙な足音』でフランボウが改心したことになることに言及している。

また、電子書籍のみと思われるが、曽根寛樹が『青い十字架』と『秘密の庭』の雑誌掲載版の翻訳を『ヴァランタン、奇妙な手がかりを追う/封鎖された庭の謎』（2016年）としてEBパブリッシングより刊行している。訳者による解説によると雑誌掲載版と短編集収録版では200か所以上の異同があるとのことであり、「もっとも目立つのは句読点の変更」であったとの指摘もなされていた。緻密な読みをなしていることが窺い知れる。

## 註

1 The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.20.

2 Ibidem.

3 「飛ぶ星」では悪の一定水準を保つことはできないという議論で、ブラウン神父はフランボウに足を洗う決意を促す。その議論に列挙される、悪の一定水準を保ちきれなかった実例が金持ちあいての盗賊、貧民の父たるアナーキスト、富豪を金銭から自由にし、貧者が金銭を無償で手に入れられる運動 free money movement の実践者たちであることも傍証となるだろう。

4 The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.655.

5 「ブラウン神父の復活」The Resurrection of Father Brown では、ブラウン神父はアメリカ先住民の農家が自作農となるための政治的活動を行ったとされているが、これは分配主義の実践例に思える。また、チェスタトンのカトリック改宗後の作品である「犬のお告げ」The Oracle of the Dog で、ブラウン神父は教皇レオ13世 Leo XIII の回勅「レールム・ノヴァールム」Rerum Novarum の講義のため原稿を執筆しているが、この回勅は労働問題を扱ったものである。レオ13世は労働組合を認めた教皇でもある。

6 The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.20.

7 神が従わなければならないとか、神が理性に縛られているという表現は、神の全能と両

立しないのではないかと疑問が生じるかもしれない。しかしながら、トマス・アクィナス『神学大全』*Summa Theologiae*によれば、神が善でしかありえないということ、言い換えるなら神が罪を犯しえないということはその全能と矛盾はしない。罪や悪は本来存在すべき善や完全性の欠如であり、それ自体存在するものの理 *ratio entis* に反しているからである。神の全能とは存在するものの理に合うことはすべてなしうることなのである。Cf. ST, I, q.25, a.3, cor..

<sup>8</sup> The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.235.

<sup>9</sup> O.c., p.83.

<sup>10</sup> 創元推理文庫版での対応箇所の訳文で筆者のように、この箇所での神なき宇宙の描写に、クトゥルフ神話的な印象を受けた読者もおられるかもしれない。管見の限り、チェスタトンとラヴクラフト H. P. Lovecraft(1890-1937)の宇宙観について比較した文献は Edward T. Babinski, 'The Dueling Cosmoses of H. P. Lovecraft and G. K. Chesterton' in: 'Crypt of Cthulhu' vol.2, no.5, edited by Robert M. Price, Bloomfield, 1983, pp.25-30 のみである。両者とも宇宙の広漠さが不満を起こさせるので、宇宙を小さいものと想像し(ラヴクラフト)、あるいは論じた(チェスタトン)など宇宙について共通した気分を持っていたことを指摘している。Cf. *ibid.*, p.26. 両者は重複する時期に生きており、同じ時代の宇宙像を受け取った上で相互に裏返しの思想の下に執筆していた。してみれば、チェスタトンがその宇宙から彼にとって本質的な原理である神を除いて描写した場合、ラヴクラフトの宇宙に近づくのは道理であろう。

なお前掲の文献によれば、ラヴクラフトは手紙の中で何度かチェスタトン思想に言及しているが、その評価は“obsolete”, “ignorant”, “frivolous”, “irrelevant”, “meaningless” 等々と芳しくないようである。Cf. *ibid.*, p.25.

<sup>11</sup> 英文は Project Gutenberg Australia 内 G. K. Chesterton, 'St Francis of Assisi'(http://gutenberg.net.au/ebooks09/0900611.txt, 2019年11月4日閲覧)を参照した。春秋社版 G. K. チェスタトン著作集での対応箇所は、G. K. チェスタトン『G. K. チェスタトン著作集 6 久遠の聖者』生地竹郎訳(春秋社, 1976年), p.27.

<sup>12</sup> 訳出に当たっては、前記春秋社版著作集 6 を参照した。

<sup>13</sup> 英文は前掲サイト前掲ページ参照した。春秋社版 G. K. チェスタトン著作集での対応箇所は、G. K. チェスタトン『G. K. チェスタトン著作集 6 久遠の聖者』生地竹郎訳(春秋社, 1976年), p.25.

<sup>14</sup> G. K. チェスタトン『G. K. チェスタトン著作集 6 久遠の聖者』生地竹郎訳(春秋社, 1976年), p.25 参照。

<sup>15</sup> Cf. “I mean that there was no future for “natural magic”; to deepen it was only to darken it into black magic.” 「私が言いたいのは、自然魔術には未来がないということである。それを深めることはそれを暗くして黒魔術にしまうことである」(英文は前掲サイト前掲ページを参照した)。

<sup>16</sup> Cf. The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.63. “Men may keep a sort of level of good, but no man has ever been able to keep on one level of evil. That road goes down and down.” 「善の水準のようなものなら保つことができますが、悪の一定水準にとどまり続けた者はこれまでにありません」。

<sup>17</sup> Cf. o.c., p.154. “.....there is this about such evil, that it opens door after door in hell, and always into smaller and smaller chambers. This is the real case against crime, that a man does not become wilder and wilder, but only meaner and meaner” 「こういう悪は、地獄の扉を順々に開けて行って、どんどんもっと狭い部屋に入り込んでいくようになっていくのです。つまり、[悪によって]人間がどんどん乱暴になるということではなく、どんどん卑劣になるということ、これが犯罪に反対しなければならない本当の理由です」。

<sup>18</sup> O.c., p.84.

<sup>19</sup> 以下の議論では materialism という語だけでなく、materialist, materialistic などの語も materialism を前提とした語として、同書中での materialism の意味を確定する資料として扱う。

<sup>20</sup> この箇所では正確には、“I might convince a man that matter as the origin of Mind is quite meaningless, if he and I were very fond of each other and fought each other every night for forty years. But long before he was convinced on his deathbed, a thousand other materialists could have been born.”「お互いに好意を寄せあっている相手と 40 年間毎晩議論を戦わせれば、物質が精神の起源であるなどナンセンスだと信じさせられるかもしれない。だが、臨終の床でその人にそう信じさせるまでには、他の唯物論者が 1000 人も、とっくの昔に生まれてきているだろう」と述べられている。（英文は前掲サイト内 G. K. Chesterton, St Thomas Aquinas(<http://gutenberg.net.au/ebooks01/0100331.txt>, 2019 年 11 月 4 日閲覧)を参照した)。

<sup>21</sup> Cf. o.c.: “Even the materialists have fled from materialism; and those who lectured us about determinism in psychology are already talking about indeterminism in matter.”「物質主義者さえ物質主義から撤退しており、心理学で決定論を我々に講義していた人々が、物質の領域ではとっくに非決定論を我々に語っている」；“.....all that cowardly materialism, which conceives man as wholly servile to his environment.”「人間は全面的に環境に隷属していると捉えている、かの臆病な物質主義.....」。

<sup>22</sup> Cf. o.c.(2019 年 11 月 5 日閲覧): “.....those who are called Anthropologists have to narrow their minds to the materialistic things that are not notably anthropic.”「.....人類学者と呼ばれる人々がその関心を materialistic な事物にせばめているが、それら materialistic なものは明白に人類的ということはできない」。

<sup>23</sup> Cf. o.c.: “.....he is actually less exacting than many thinkers, much less so than most rationalist and materialist thinkers.....”「彼は〔聖トマス〕、はじめの一步に何が伴っているかということについて厳格厳正を期すという事が、現に多くの思想家より少なかった。特に、合理主義思想家や materialist の思想家の大多数に比べると実に少なかった」。

<sup>24</sup> とは言うものの、大文字で書かれているのはこの箇所だけである。

<sup>25</sup> この思想は、トマス・アクィナスの『神学大全』および『神学提要』Compendium Theologiae でも語られている。Cf. ST, I, q.76, a.5; CT, I, c.128; c.151.

<sup>26</sup> 『聖トマス・アクィナス』でチェスタトンは、1 か所で集中してキリスト教思想史の概略を述べているわけではない。以下の記述は同書内に散在するチェスタトンの記述を編集して見出したものである。

<sup>27</sup> Cf. G. K. Chesterton, St Thomas Aquinas(<http://gutenberg.net.au/ebooks01/0100331.txt>, 2019 年 11 月 6 日閲覧): “.....the genius of Augustine, who had been a Platonist, and perhaps never ceased to be a Platonist; through the transcendentalism of the supposed work of the Areopagite; through the Oriental trend of the later Empire and something Asiatic about the almost pontifical kingdom of Byzantium:.....”

“.....Augustine derived partly from Plato,.....”

<sup>28</sup> Cf. o.c.: “Plato might despise the flesh.”

<sup>29</sup> Cf. o.c.: “There really was a new reason for regarding the senses, and the sensations of the body, and the experiences of the common man, with a reverence at which great Aristotle would have stared, and no man in the ancient world could have begun to understand.”

<sup>30</sup> Cf. o.c.: “In a word, St. Thomas was making Christendom more Christian in making it more Aristotelian.”「こう言ってよければ、聖トマスはキリスト教世界を、よりアリストテレス的にすることで、さらにキリスト教的にしていたのだ」

<sup>31</sup> Cf. o.c.: “The Thomist philosophy began with the lowest roots of thought, the senses

and the truisms of the reason.....St. Thomas was willing to begin by recording the facts and sensations of the material world.....”; “There really was a new reason for regarding the senses, and the sensations of the body, and the experiences of the common man, with a reverence at which great Aristotle would have stared.”

<sup>32</sup> Cf. o.c.(2019年11月7日閲覧): “he was willing to begin to study the reality of the world in the reality of the worm. His Aristotelianism simply meant that the study of the humblest fact will lead to the study of the highest truth”; “he is content, as we shall see, to say that it involves the recognition of Ens or Being as something definitely beyond ourselves. Ens is Ens: Eggs are eggs, and it is not tenable that all eggs were found in a mare's nest.”

<sup>33</sup> Cf. o.c.(2019年11月6日閲覧): “It is bound up, in the modern view, with the most monstrous, the most material, and therefore the most miraculous of miracles. It is specially connected with the most startling sort of dogma, which the Modernist can least accept: the Resurrection of the Body.” 「この Materialism は、近現代的なものの見方にとって、最高に怪奇な、最高に material な、ということは当然奇跡のうちでも最高に奇跡的なものと結び付いている。この Materialism が特別に結び付いているのは、最もびっくりさせられる種類の教義で、近代主義者にとって最も受け入れがたい代物、すなわち「体の復活」である」

<sup>34</sup> Cf. o.c.: “After the Incarnation had become the idea that is central in our civilisation, it was inevitable that there should be a return to materialism, in the sense of the serious value of matter and the making of the body. When once Christ had risen, it was inevitable that Aristotle should rise again.”

「受肉がわれわれの文明の中心的理念となった以上、materialism への回帰が起きるのは避けられなかった。物質の真の価値を知り、物体の創造の真の価値を知るという形でそれは起きた。キリストがよみがえった以上、アリストテレスもまたよみがえることは避けようなかった」

<sup>35</sup> Cf. o.c.: “It may be said that this is mere common sense: the common sense that pigs are pigs; to that extent related to the earthbound Aristotelian common sense; to a human and even a heathen common sense. But note that here again the extremes of earth and heaven meet. It is also connected with the dogmatic Christian idea of the Creation: of a Creator who created pigs, as distinct from a Cosmos that merely evolved them.” 「これは常識に過ぎない、ブタはブタであるという常識、「ブタはブタである」と言いだすほど地上に固定されたアリストテレス流の常識に関連する常識、人間らしい、そして異教徒らしくすらある常識。しかし、ここでもまた地上と天という両極端が出会っていることに気づいてほしい。この常識はキリスト教の教義に現れる創造の理念に結びついている。ブタを造った創造主、ブタを進化させたにすぎない宇宙とは区別されるお方の理念に」。

<sup>36</sup> この概略は、チェスタトンが20世紀初めまでに手に入る研究を元につかみとったものであることに留意されたい。『聖トマス・アキナス』は出版当時、トマス・アキナス研究で知られる Etienne Gilson をも感嘆させたと言われるが、東方のキリスト教は仏陀の国に近い砂漠までさまよい出ているから、輪廻の国の身体蔑視、すなわち身体は精神にとって替えが利く非本質的なものに過ぎないという思い込みが混入している等の偏見としか言いようのない記述も見受けられる。

<sup>37</sup> なお、ここでの悪魔の物質主義、現実主義という考えは、後年になると影をひそめる。むしろ、悪魔の霊性主義(?), 非現実主義という考えがチェスタトンの中には出てくる。

『詩人と狂人たち』The Poet and The Lunatics(1929)所収の「孔雀の家」The House of the Peacock では、天使が善い天使たちに槍で、つまり現実役に役立つ武器で武装させているのに対し、サタンが悪魔たちに孔雀の羽という実際には役に立たない武器で武装させてい



るという絵の紹介と解釈がなされている。『詩人と狂人たち』南條竹則訳、電子書籍版、東京創元社、2016年、位置 no.2425ff.参照。だが、この非現実主義すなわち物質主義からの乖離は悪魔のわざが現実的な力を持たないという意味ではない。

『聖トマス・アクィナス』(1933)では神の創造は物質的になされた、つまり、物質的存在は善いのだが、悪魔のわざはそれを悪しき意図のもとにねじまげようとする全面的に霊的なはたらきかけであると論じられる。Cf. G. K. Chesterton, 'St Thomas Aquinas'(<http://gutenberg.net.au/ebooks01/0100331.txt>, 2019年11月7日閲覧)：“.....good things, like the world and the flesh have been twisted by a bad intention called the devil. But he cannot make things bad; they remain as on the first day of creation. The work of heaven alone was material; the making of a material world. The work of hell is entirely spiritual.”

<sup>38</sup> 註 32 および註 35 参照。

<sup>39</sup> The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.368.

<sup>40</sup> この‘He was made Man’は、創元推理文庫版(中村保男訳)(1959, 1982)では「人は人として創られたり」と神による創造の教義を語るものとして訳され、ハヤカワ・ポケット・ミステリ版(村崎敏郎訳)(1956)では「彼は人間になった」とキリストの受肉の教義を語るものとして訳されている。『ブラウン神父の不信』中村保男訳、電子書籍版、東京創元社、2016年、位置 no.1544 および『ブラウン神父の懷疑』村崎敏郎訳、早川書房、1956年、93頁参照。

‘He was made Man’は、英語では伝統的に受肉の教義の表現らしいが、十分調査できていない。古い表現らしく、現行の英語の典礼文では確認できない。しかしながら、ラテン語のニケア・コンスタンティノーブル信条で受肉の教義に当たる‘[Filius Dei] homo factus est’を英語に逐語的に直訳すると確かに‘He was made Man’となり、また、ニカイア(ニケア)公会議で三位一体と受肉の教義の採択に貢献したアタナシウス Athanasius による受肉の教義についての議論の1節「彼〔神〕が人間になったので.....」が“For He was made man.....”と訳されている例もある。Cf. A Select Library of Nicene and Post-Nicene of the Chirstian Church, 2<sup>nd</sup> Series, vol.4: St. Athanasius, , edited by Nenry Wace, D.D. and Philip Schaff, D.D., LL.D., Oxford; New York, 1892, p.65.

そう考えるなら村崎敏郎訳に軍配が上がりそうだが、チェスタトンが語る物質主義的現実尊重は受肉の教義だけでなく創造の教義にも結び付いており、実際に『聖トマス・アクィナス』で「ブタはブタ」すなわち動物は動物にほかならないとアリストテレス的常識 Aristotelian common sense が語られている際、結び付けられている教義は創造の教義である。註 35 参照。「犬のお告げ」でのテキストは、動物は動物として扱うべきという文脈を持っているので文脈からは中村保男訳の方が可能性が高い。

<sup>41</sup> 註 10 でチェスタトンとラヴクラフトを比較したが、『ブラウン神父』における物質的存在の重視を概観したところで、この観点からチェスタトンとラヴクラフトを再度比較したい。クトゥルフ神話と呼ばれる神話群におけるクトゥルフなどの特徴は、肉体を持った生物であること、すなわち物質的存在であることである。そしてクトゥルフは、ラヴクラフトの海の生物に対する嫌悪感を反映していたと言われ、蛸に譬えられる。異形の怪物が蛸のような頭をしているとされているのであるが、いっぽう、チェスタンは「鱧の影」で、「花は蛸と同じくらいくだらない」と述べる戯画された科学者に対抗して、主人公の詩人に「蛸は花と同じくらい美しい」と言わせる(『詩人と狂人たち』南條竹則訳、電子書籍版、東京創元社、2016年、位置 no.958ff.)。

なお、ラヴクラフトの小説『クトゥルフの呼び声』には花について以下のような視点人物=語り手の独白がある。「私は宇宙が恐怖で隠しているすべてを見てしまった。それ以来ずっと、春の空や夏の花々さえもが私にとっては毒以外の何ものでもない」「I have looked upon all that the universe has to hold of horror, and even the skies of spring and the

flowers of summer must ever afterward be poison to me”と語っている。Cf. H. P. Lovecraft, *The Call of Cthulhu*, in: *The Complete Fiction of H. P. Lovecraft*, Amazon Services International, Inc., no date, kindle edition, 位置 no.1367. チェスタトンがラヴクラフトを読んでいたかどうかについては不明だが「鱗の影」とラヴクラフトの関係を考えるツイートが、管見の限り 2016 年以降ちらほら現れる。本文での論考の繰り返しとなるが、チェスタトンがラヴクラフトを読んだことがなくとも、2 人とも同時代を生き、同時代の典型的な宇宙観にいつぼうは伴走し、いつぼうは批判したので、よく似たイメージが現れると考えることもできるかもしれない。

<sup>42</sup> The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, pp.434-35, “...if you don't know that I would grind all the Gothic arches in the world to powder to save the sanity of a single human soul, you don't know so much about my religion as you think you do.”

<sup>43</sup> O.c., p.384, “Lying may be serving religion; I'm sure it's not serving God.”

<sup>44</sup> O.c., p.321, “I think I am an anti-clerical,.....”

<sup>45</sup> Ibidem, “but there wouldn't be half so much clericalism if they would only leave things to the clerics.”

<sup>46</sup> Cf. O.c., p.12, “.....exactly because Valentin understood reason, he undersood the limits of reason.”

<sup>47</sup> Cf. O.c., p.10, “Valentin was a sceptic in the severe style of France, and have no love for priests.”

<sup>48</sup> ヴァランタンは、何の手掛かりもない状況ではあてずっぽうに動くよりほかない、心惹かれるものをもし見かけたら追跡相手もまたそれに心惹かれた可能性があるのとおりあえず探してみる、何の手掛かりもない状況で少しでも追跡相手に近づく可能性があるならそれに賭けるほうが、何もしないより追跡相手に追いつく可能性は高いと考え、あてずっぽうに目を引くものを訪ね歩くという方法をとる。これは理性の限界を心得て、偶然による手掛かりを呼び込むための努力であり、チェスタトンの正しい理性使用と本文中でも位置づけられている。ヴァランタンの理性使用の正しさについては、山形和美も『『ブラウン神父』ブック』(春秋社, 1986 年)所収の評論「叡智の非論理」で言及している。前掲書 pp.91-92 参照。なお当該の文章は山形和美『チェスタトン』(清水書院, 2000 年), p.174 にも転載されている。

しかし、上記努力は人間の限界ひいては宇宙の限界内での努力に終始しており、人間と宇宙の限界を超える神的真理の下で人事を尽くすことではない。ここがブラウン神父との違いであると思われる。

<sup>49</sup> Cf. The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.39, “on the blind face of the suicide was more than the pride of Cato.”

<sup>50</sup> 創元推理文庫版(中村保男訳)、ちくま版(南條竹則・坂本あおい訳)、ハヤカワ・ポケット・ミステリ版(村崎敏郎訳)はいずれもカルタゴ必滅を唱えた大カトーとし、EB パブリッシング版(曾根宏樹訳)は小カトー、新潮社版(橋本福夫訳)では「ウティカのカトー」すなわち小カトー「であろうか？」としている(同書 p.74 参照)。ハヤカワ文庫版(田口俊樹訳)は「古代ローマの大軍人カトー」としており、どちらとも明言はしていない(同書 p.87)。

John Peterson 註釈のチェスタトン選集所収「秘密の庭」の註では、このカトーはウティカのカトーとされており、プライドのゆえにカエサルに屈服するのを拒んで自殺したと述べられる。Cf. *The collected works of G.K. Chesterton*, v. 12. *The Father Brown stories*; pt. 1 with introduction and notes by John Peterson, Ignatius Press, 2005, p.69: “...whose pride led him to commit suicide rather than submit to Julius Cæsar.”

なお、John Peterson の註に従うなら、pride は七つの罪源の 1 つとして傲慢と訳すべきであるのかもしれない。それが正しいなら、チェスタトンはヴァランタンの死を好意的には描いていないこととなり、本稿の議論は根底から覆ることになる。

<sup>51</sup> Cf. The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.190, “He carries it



[poison] so that he may never be captured, like Cato.” もっとも小カトーは服毒自殺ではなく割腹自殺である。

<sup>52</sup> ちなみに、『ポンド氏の逆説』（南條竹則訳，電子書籍版，東京創元社，2017年）所収「ガヘガン大佐の罪」の註11（位置 No.863）では『悲劇カトー』（Cato, a Tragedy）の主人公カトーについて大カトーのこととしているが，これもウティカのカトー，すなわち小カトーである。

<sup>53</sup> この経緯について，筆者は同時代資料を参照することができなかったが，塩野七生『ユリウス・カエサル ルビコン以後 ローマ人の物語 V』（新潮社，1996年），pp.242-247で取り上げられており，特に自死の意図について pp.245-246 で言及され，かつ論評されている。

<sup>54</sup> Cf. The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.38, “I must ask him to confess, and all that.”

<sup>55</sup> Cf. G. K. Chesterton, ‘Orthodoxy’(<http://gutenberg.net.au/ebooks13/1301221h.html>), 2019年11月7日閲覧: “Not only is suicide a sin, it is the sin. It is the ultimate and absolute evil.....” 「自殺は罪だというのではなく，自殺こそが罪なのだ。それは究極の，絶対的な邪悪だ.....」

<sup>56</sup> Ibidem: “The man who kills a man, kills a man. The man who kills himself, kills all men; as far as he is concerned he wipes out the world.”

<sup>57</sup> Cf. ibidem: “The suicide is ignoble because he has not this link with being: he is a mere destroyer; spiritually, he destroys the universe.”

<sup>58</sup> Cf. ibidem: “A martyr is a man who cares so much for something outside him, that he forgets his own personal life. A suicide is a man who cares so little for anything outside him, that he wants to see the last of everything. One wants something to begin: the other wants everything to end.”

<sup>59</sup> Cf. ibidem: “.....he sets his heart outside himself: he dies that something may live. The suicide is ignoble because he has not this link with being: he is a mere destroyer; spiritually, he destroys the universe.”

<sup>60</sup> Cf. The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.38, “.....Brayne, like so many scatter-brained sceptics, was drifting to us; ..... Brayne would pour supplies into the impoverished and pugnacious Church of France;.....”

<sup>61</sup> ブラウン神父の人物評価基準ではなく『ブラウン神父』の人物評価基準であることに注意されたい。

